

# 十字架につけられし女<sup>ひと</sup>

- 座古愛子覚書 -

小川 修

**抄録：**座古愛子は明治11年に生まれ、終戦直前に亡くなったが、少女時代にリューマチになり、生涯寝たまの、この世界的には不遇の人であった。23歳のとき受洗して以来、多くの詩・歌・随筆を発表、戦前はキリスト教詩人としてかなり知られた人であった。しかし、戦後彼女の名は忘れられ、その著書も今ではほとんど入手できない。本稿は、この忘れられた詩人の驚嘆すべき信仰の解明を試みたもの。

**キーワード：**病氣、貧困、死、十字架即復活

## はじめに

座古愛子(ざこあいこ)という名を聞いても、今日この名を知っているキリスト者はほとんどおるまい。筆者もその一人だった。彼女は明治11年(1878)神戸生まれ。少女時代にリューマチに侵され、昭和20年(1945)68歳で亡くなるまで、身体を動かすことができず、ただ祈りと、わずかに動く指で詩や和歌や随筆を綴って生きた薄幸のキリスト者である。だが、その生涯は、当時彼女を知る一牧師が「神の指になれる一の創作品」と賛嘆したように、まさに神の奇蹟であった。今日彼女の残した文書を読んでも、その深い霊性と福音理解は驚嘆に値する。事実、明治末期から昭和初期まで、彼女の書を読んで生きる勇氣と力を与えられた人は数え切れない。しかし、残念なことに、日本のキリスト教界は戦後彼女の名を忘れてしまった。筆者がたまたまこの人の名を知ることを得たのは、実は浄土真宗の有名な念仏者中村久子女史<sup>(1)</sup>を通じてである。

中村久子といえば、NHKの宗教の時間にほぼ毎年、特集番組のように取り上げられ、今では真宗門徒の間では知らぬ人のない、現代の「妙好人」であるが、この人も幼児に両手両足を失い、地獄を

生きた人だった。この人がその晩年に、いわば信仰告白ともいえる不思議な詩を残した。それは「あるあるある」と題する、次のような短い詩である。

### ある ある ある

さわやかな秋の朝  
「タオル 取ってちょうだい」  
「おーい」と答える良人がある  
「ハーイ」という娘がおる  
歯をみがく  
義歯の取り外し  
かおを洗う  
短いけれど  
指のない  
まるいつよい手が  
何でもしてくれる  
断端に骨のない  
やわらかい腕もある  
何でもしてくれる  
短い手もある  
ある ある ある  
みんなある  
さわやかな秋の朝

筆者が、この一度読んだら忘れがたい詩を「不思議」といったのは、ここに何か真宗的というより、むしろキリスト教的なものを感じたからである。なぜか。この詩が人の胸を打ってやまないのは、「ないないない」が、即、「あるあるある」だ、という点にあるが、筆者の理解によれば、これこそまさにパウロ的福音以外のなにものでもないからである。パウロにとっては「死即生」・「無即有」とは、神の声、すなわち、まさに福音であった(R4:17)。他宗教のこととして、筆者に誤解があるかも知れないが、浄土真宗の根幹はいわゆる「二種深信論」である。その二種深信とは、一つに自分は救われ難い罪人であると深く信じること、二つには弥陀の本願はそのような罪人をこそ救ってくださるのだと深く信じることの二つをいうが、これは親鸞から、中村久子が愛読した『歎異抄』、そして蓮如に至るまで、一貫した基本的な立場である。しかし、江戸時代の大谷派の伶俐な学匠鳳嶺がその著書の一つの中でいみじくも指摘しているように、この二種深信<sup>(2)</sup>からは「我が生命、即ちキリストなり」(Ph1:21)というようなことは出て来ない。厳格な真宗教学という立場からはたしかにそうであろう。もちろん、中村久子はそんなことはいっさい関係なく、自由に自分の救いを求めて信心を形成していった。そしてその途上で座古愛子に出会ったまでである。しかし、若き日の久子にとってこの出会いは決定的であった。

「横臥されている(座古)女史のお顔は、(本の)口絵の写真より以上に美しい。神々しい観音様のように温かい。...この時の印象は終生忘れることができせん。女史とは初対面なのに、目と目を見交わした刹那、涙は堰を切って流れ出しました。不自由な者のみか知る苦痛の境地、そして重度の障害者のみに与えられた魂の交流する世界 それはどんなに尊い数秒だったことでしょう。ようやく涙の顔を上げて言葉を交わし、語りつ語られつするうちに、...生きているのではない、“生かされている”と、当時無宗教だった私にも、心の底に無言の声がはっきりと響きました。(中村久子『こころの手足』p.227以下)

「初めて心の眼が覚めました。いいえ私が覚めたのではなく、女史によって覚まして頂きました。...それ

以来親を恨み世を呪うことはやめました。女史にお会いしたことが、どんな名僧知識の御高説よりも、高価な書物よりも、私には偉大な慈光であり、いかに尊い教えを得させて頂いたかは計り知れぬことでございます。」(同p.229以下)

それにしても、久子にこのような深い霊的感化を与えた座古愛子とはどのような人だったのだろうか。筆者には長い間の謎であった。しかし、二年前にたまたま彼女の著書が三冊ほど入手でき、あと一冊は某大学図書館が所蔵していることを知り、そこから借り出し、コピーすることを得た。この四冊のうち三冊はほぼ百年前のものである。コピー機にかけると壊れそうだった。彼女は他にも著作があり、これだけの資料では必ずしも充分とはいえないが、その信仰を知るにはこれで一応足りると判断し、今回、忘れてはならない日本の生んだすぐれた信仰者の覚書として、感謝をもって拙稿を本誌に寄稿させていただいた。座古愛子女史については、今後その著作が再刊され、どなたかが正確な伝記を書いて下さることを願っているが、現在、一般の読者が資料を直接入手することは困難なので、本稿では引用を多くしている。

## 少女時代と祖母みつのこと

座古愛子は明治11年(1878)12月31日、兵庫東川崎町(現神戸市中央区)に生まれた。しかしこの生い立ちそのものからして、皆に祝福されての誕生というわけではなかったようだ。その複雑な出生事情を語る前に、愛子の祖母・武井みつについて、まず語らなければなるまい。

「祖母は信州下諏訪の人。若くして良人に死別し、それがたみの長女を伴ひ、亡き良人の後世を弔はんとて、家屋敷を路銀に代へて、西国巡礼に出たのであります。

女親子の足弱乍ら、信心の一念凝っては、幾百里の山川越て、

いままでは親とたのみしおひづるを  
ぬいでおさむるみののたにぐみ

美濃の谷組寺で、三十三所打ち終り、悲しい思ひ出

の故郷へは帰へらず、いささかのしるべを頼り、兵庫に居付き、後、縁あって播州飾磨(しかま)の人に嫁ぎ、私の母を生んだのは祖母が三十五歳であったので、「すゑ」と命名したと聞きました。(『闇より光へ』p.35以下)なお同書よりの引用は、以下本稿ではすべてページ数のみ示し、書名は略す)

すゑは十八歳で兵庫の「浜伊屋」という旧家(浜田姓)の入婿に嫁ぐが、この入婿が道楽者で、困り果てたすゑは、その間に生まれた長男(愛子の実兄)を連れて祖母の実家に戻ってくる。母はそこでたまたま兵庫に逗留していた薩摩藩の一家老の男児の乳母に採用され、その収入で祖母と長男を養った。この務めも終わった数年後、昔の媒酌人がやってきて、かつての婚家の夫が今は真面目になり復縁を望んでいる、どうかもう一度戻ってやってくれという。意を決したすゑは二度と越すまいと思って出た婚家の鬨を、もう一度跨いで帰ったものの、どういうことか、夫はまたしても道楽の淵に転落、絶望したすゑは再び長男を連れて実家に舞い戻ることになる。しかし今度は身重であった。そうして生まれて来るのが、愛子である。

ちょうどそのころ、あることが起こる。それは祖母のキリスト教入信であった。

「其頃祖母は小あきなひに出ておりましたが、お得意さまの奥様から、基督教をききました。昔、

はるばると登れば書写<sup>(3)</sup>のやま嵐

松のひびきも御法(みのり)なるらん

と草鞋に豆踏み出した、巡礼の旅も、亡き良人の菩提と、我れら母子の後世願ひには物かはと、遍歴した信仰の勇婦。悲しいかな基督教によれば、其苦行も救ひの役には立たぬとの事。失望と共にさらば、何によって救はる可きかとの疑問が生じます。それは聖書が解決してくださる。「天下の人の依り頼みて救はる可きほかの名を、たまはらざればなり」。どうしてもキリストてふ門を通らずしては、神の聖前(みまえ)に行けぬ事を、教えられ、ここに始めて真の救ひ主を知って大喜び、其門から入れられたのは、さう長くはかからなかったさうです。奥様の導きによってキリスト教の講義所で教へられて、八人の受洗者が出来たので、最早講義所では無く「兵庫基督教会」と改称されたのであります。祖母は八名中の一人であったのは幸

ひであります。」(p.46以下)

これに続けて愛子は祖母の信仰を次のように述べている。

「伝道は、伝道者のみの仕事でも、閑人の時間つぶしでもありません。信者よりほとばしり出る噴水であります。噴水が、其水源池より高く上らぬ様に、キリスト以上のわざは為し得ずとも、細くともかなり高く噴きあげて、周囲をうるほすのは容易の事です。祖母を導いた人は、医師の奥様でした。有閑夫人である可きに、感ずべきキリスト者であった為に、出入の商人を捕へては、一言二言づゝでも福音を伝へられたので、祖母も其一人として、福音を聞く光榮に浴し、世の思みに渴き切った魂に大いなるうるほひを受たのであります。さらに其源へ登るべく示されて、とうとう救ひの門に入る事が出来たので、此度は、檜原松原分け行かずとも、救ひは近くにあったのです。しかし三十三ヶ所の、深山幽谷に分け入ったのも決して無駄では無く、険阻を辿り、谷底へ下る時、御詠歌を唄ひ乍ら、一番に弥陀の名を呼び奉った事などは、信仰の土台をすゑるに、深く地を掘り下げた様なものでありましたから、基督教の土台を其上にすゑたので、「皆ごとごとく働きて益を為す」とは此事であります。

艱難の深甚な時に、祖母の救はれたのは、一家三人救はれたも同然でありました。「其言ひ尽くされぬ恩恵によりて、我れ神に感謝するなり」と、感謝に充ちて、何事にも忍ぶ心には、不平不満の影だにも映らず、救はれた喜びを終世持ち続けて、キリストを愛するに至った。最初の愛をはなるゝ事なき為に、人々を愛しよう。殊に貧しい人を愛さねばならぬ。との一念から、日毎の少しの儲の中を裂き、幾分かを取りのけ置き、日曜には必ず休業して、教会の礼拝に集ふた後は、日頃見ておいた、貧家を訪ふては、愛の言葉に添えて、小さい金包を、主の名によって与え、「右の手に為すところの事を左の手に知らずな」との、聖語通りに行ふのが、唯一の楽しみでありました。己が貧しさを忘るゝには、他の貧者を助くるにかぎりませう。」(p.47 ~ p.49)

祖母・母・兄、そして愛子という四人の貧しい生活は続いた。母は愛子兄妹の養育を祖母に任せ、近くの病院に住み込み看護婦として働き、祖母は毎日決まった時間になると、二人の孫を連れて病院の壁近くに行き、その節穴から母に子供たちを垣間見せたという。しかし、ある夜、思いがけ

ぬ禍が襲う。「といふのは一夜のうちに、祖母と私とが、一時に両眼腫れ上りました事です。俄に医師よ薬よと、無い中からも手を尽した末、私は全快し、祖母は盲目となって仕舞ひました」(p.51)。母は病院を辞し、家に戻って働くほかなく、12歳になっていた兄は農家に年期奉公に出すことになる。「男になった気で働いていた母に、やがて再婚話が持ち上がる。母はもう結婚はこりごりとは思っていたが、失明した親と幼い子供のことを考え、自分が「一朝病床の人となった時...、一家枕を列べて、餓死を待つ惨状となるは必定」(p.56)と思い、その話に応ずることになる。年齢33歳。かくて愛子の新しい父となった人の名は、座古久兵衛といい、陽気で男気があり、愛子を生涯可愛がり、母すゑの死後も実子同然に育ててくれる人物である。愛子が終生、「座古」という、この血のつながらぬ養父の姓を名乗ったのは、そのせいであろう。

父久兵衛も再婚で、死別した前妻との間には実子はなかったが、養女が一人いた。愛子には義理の姉ということになる。久兵衛は家鴨や鶏の養殖養鶏を生業としていたようである。愛子の母すゑは、祖母と愛子、それに年期奉公があけて戻ってきた愛子の兄も連れての再婚で、「親と二人の子供とを連れてある私は、よそのお内儀方よりは四倍の働きをせねばならぬ」(p.73)とあって、なりふりかまわず働いた。とはいえ、この時代は、後に不遇の娘時代を送らなければならなくなる愛子にとって、もっとも幸福な時だったようである。次のように述懐している。

「子供三人の中で父の一番可愛坊は私でありました。母は蔭でよく言ひました。生みの親より育ての親といふて、父には大恩がある。何か父が立腹して母に怒鳴り付けてみなさる時など、少しでも母をかばふような顔付や言葉を出してはなりませぬ、とよく申し付けられておますので、どの様な時でも、母の味方はせぬのであります。

祖母は私に昔話を、每晚聞かしてくださいましたが、桃太郎や、猿蟹合戦よりも、聖書の人物伝というべく、旧新約中の篤信家の伝記をよく、話して下さいました。アブラハムが天幕持っての遊牧の旅のところでは、人間の一生は、皆旅路を辿ってあるのだよ。種々

様々な憂き苦勞はまぬがれ難い。さらば讚美歌に  
たのしきくには天にあり  
聖者は栄えかゞやく

とある。永遠の故郷天国こそ、我れらに安息を与えられる所です。私が盲目になり、おまへが全治したのは有難い事です。私はもう世の中に告別するに間のない者、おまへは生先の長い身であるから、それがもし盲人になったら、どれ程悲しみが深いでせう。老いて目を失っては何の役にも立たぬ。貧しい人を喜ばす事も出来ぬが、併し靈的には為す事がある。全世界の人の為に祈りの御用が出来る。体を持っての昔より甚だ広い。是を思へば感謝せずにはゐられませんとよく申しておましたが、負け惜みでも何でも無く、其通り信じて凡ての事にことごとく感謝して、不平な顔は一度も見せた事のない人でした。...私が此病気になり、世をも人をも恨む時に、昔の祖母の笑顔の不思議を、深く思ひ廻らしました。どう考えても分かりません。然し自分が祖母の様に救はれて、心機一転した時に、始めて、笑顔の出所が分ったのであります。」(p.75 ~ p.77)

10歳のとき、「新田夜学会」という、あるクリスチャンが働く子供のために開設していた塾に入れて貰う。それは三年続いたが、愛子が、ともかく学校といえるものに通ったのはこれだけである。そしてここでの楽しい勉学は、愛子生涯の懐かしい思い出となる。

## 別れと貧しさと

明治22年4月、愛子12歳のとき、慈愛あふれる祖母が眠るように天に召された。74歳だった。祖母は家中ただ一人のクリスチャンだったが、兵庫教会より牧師と信徒数名が来て告別式がとり行われた。

同年7月、母は男児を出産したが、それまでの無理がわざわざいしてか、産後の肥立ちが悪く、一週間後にこの世を去る。残された男児は12歳の愛子が必死に育てることになるが、同年秋にこの子も母の後を追うように逝く。愛子は同じ年に三人の肉親を失ったことになる。その間、愛子の実兄は家を出、また父久兵衛と前妻との養女であった義姉も実の親元へ帰ってしまい、父と愛子の二人だけの家庭になっていた。

そののち父に後妻が来る。しかし、愛子にとって継母に当たるその人が、実は愛子が将来花街に売れると見込んで後妻に来たと知った父は、すぐにこの継母を追い出してしまう。このような事情の下で、愛子の大好きだった新田夜学会での勉強も、続けることができなくなっていた。また父も健康を害し、回復後はもはや自営業はむずかしく、雇い人になって働くが、貧困はその深刻さを増す。

このような状況から脱出せんと、愛子は、母の存命中多少三味線を習っていたこともあって、芸妓になることを考え始める。16歳の時である。貧困から脱するためには、娼妓は絶対不可だが、芸妓になって高収入を得るそれが愛子にとって「玉の輿に乗る」ことであり「立身出世」であった。父を説得して、芸妓見習いになろうと、紹介者の婦人と大阪花街の東京楼という大店へ行くが、一年たったら娼妓になってもらうといわれ、驚いた愛子はその足で十里の道を父の許に逃げ帰る。

しかしその後また、今度は西の岡山近くの芸者置屋兼料理屋で、やはり芸妓見習いとして働くことになる。

「サア私もいよいよ此廓で、左袂取る(芸者になる)のかなあと、うら淋しい感もあり、また一方、せまい所ではあるが一流の名妓になってみせよう、氏なくして玉の輿に、乗るか反るかの階段をと思ひ、立身出世とよい事のみにあこがれて、浅間敷くも喜びました。

ところが意外な事には此廓は芸妓と娼妓の区別が無い、二枚鑑札とて芸妓が娼妓を兼ねるのが分りました。これは大変。左様な者になる位なら、あの堂々たるお城の様な東京楼に身を沈める筈だ。十里の道を九時間で帰ったのは何の為。これはもう一度帰らねればなるまい。」(p.112)

## 発病、そして絶望

そんな危ない橋を渡っていた愛子 17 歳、

「其年の六月に手足の関節が腫れて痛むので医師にみて貰ふと、風引の熱が籠ってリウマチスになったので、充分養生をせぬと長年煩って痼疾(不治の持病)になると生れも付かぬ不具者になる。今のうちに、充分養生せねばならぬと注意をもうされました。...

初めは赤児の頭程に腫れてみた膝関節が一週間も経つと全くもと通りに癒り、走っても痛くない迄に癒えました。もう大丈夫と思ひ、医師にお礼申して引き上げる時に、医師は申されました、「癒えたとはいへ油断はならぬ。未だ病中のつもりで養生をなさい」と、でも全快したのにと思ひ丈夫な時と同じように、振舞ました。此の油断こそ一生を病床に投げ込む大敵であった事を後に知ったのであります。」(p.124)

事実、一ヶ月もすると病気は再発してきた。そしてこれ以後、愛子は身体を動かすことのきわめて困難な身体障害者になっていく。だがその二年前、他人の子供を我が子同然に育てている愛子の養父・久兵衛の義侠心を見込んでか、ある人が、夫に死別し二人の子を抱えて生活に困窮している婦人を助けてやって欲しいと頼んできた。この婦人が、その後の愛子の新しい義母である。この母も、自分の連れて来た子の一人が病没したり、久兵衛との子を死産したり、とても愛子の世話までは手が回らなかったであろう。世話のやける愛子には居る場所がなくなっていく。

「其頃実兄は、大阪で世帯を持ってゐるので一人の妹の大病ではないか、月々何ほどの助力はせよ」との父からの手紙に、兄の妻の姉婿といふのが来て、金での仕送りは出来ぬが、妹を養はう。引取りませう。如何との事」(p.137)。愛子は本心は行きたくはなかったが、父や義母にこれ以上負担をかけたくなかったので、「行きますと言ひ張って、痛い体を初対面の人に負はれて兵庫駅から」(p.138)大阪の実兄宅にむかった。しかし、ここで職人の実兄以外は、それまで会ったこともない嫂、その母と妹。骨と皮だけになった、痛む身体を虫が這うように動かして、用便だけはなんとか一人ですましたが、食事をはじめ他のこと一切に人手が要る愛子は、ここでも歓迎されざる客でしかなかった。

とうとう五十三日目に窮状を知った父が連れ戻しに来た。骸骨のようになっていた愛子を背負って父が兵庫の家に着いたときは既に夜半だったが、義母は寝たまま、起きて声をかけてくれるでもない。「病む私の胸中の悲しみ！ああ自分は一層死

んだ方がましだと思へば一睡も出来ず。其夜は泣き明した...」(p.143)と愛子は書いている。

20歳になった愛子、

「深夜、家族の寝静まった頃に痛い体をソロソロと虫が這ふ程に這ひ出して、漸く裏の井戸端へ出ました。空澄み渡って遠目に見える鷹取山上の燈火が夜風にチラチラまたたいてゐる様は何ともいへぬ淋しさであります。あの火の様に私の命が消えかかっていると思ふても一向涙が出ぬ。他人の事のように感じられて心が澄み切っている。不思議な事もあるもので、何故とも判断が付きませぬ。死といふ間際はかえって怖ろしくなくなるのか知れぬ。非常に静肅な、崇厳な気持ちです。

此潔い心持のままにと思ひながらも眼の前に見える井戸はついそこでも、もう一步も足が動かぬ。残念！

千思万考の末、死といふ一路を撰びながら、幸ひ家族の者も知らず、今こそ！と思ふのに、大地に釘付けされた様で、一步も前へ出る事が出来ぬ。決行出来ぬのが悲しくなり、また一分程づつ後退(あとすぎ)って、床に入ってから口惜し涙に浸(ぬ)れつつも声立てぬ忍び泣きに泣き明し」(p.145以下)たという。

私はなんにも悪い事はしていないのに、そして世の中には悪い事をさんざんしておきながら無病息災で天網にかからぬ人はたくさん居るのに、何故私だけがこんなに苦しむのか、「世の人は皆憎らしい。神も仏も有るものか。...こんな荒んだ心になりました」(p.147)。女の命といわれる髪の毛も生え際から切っしまい、外見も、男か女かわからぬ「黄泉路(よみじ)から引帰して来た幽霊」(p.148)のようになっていた。愛子は絶望の極み、生きながら死んでいたのである。

## 曙光

そんなとき、愛子21歳の暮、驚くべきことが起こる。少し長くなるが、ここにそれを引用する。

「今を去る三十二年前、病臥四年、日も暮んとする十二月末つ方、死を乞ひ願へど死は来らず、家計は困難、養父母へは気苦勞なり。読む物は古本も古雑誌も、壁の破れ目にはってある、古新聞紙に至る迄、読み反へし読み尽して、暗記する程覚え込んで仕舞ひまし

た。終夜身の不幸を嘆いて泣き明し、早く夜の明ん事のみ待って、さて庇から黎明の光り射し来る時の嬉しさ。さて喜びはしたものの、何があるか。空々と其日も亦、暮なん事を待ち詫ろのが、日課であった頃の或る日、

荒壁の落て伏屋の夜寒哉

私の寝てゐる床の、前面は荒壁で、直ぐ其後方は道路であって、湊川の付け替工事に、カンテラ(さげ)で、昼夜土方の通路であった。突然大声で叱っているのがきこえて来た。奥江さんは、あゝいふ人だから、何もおっしゃらないが、あれでは困るじゃないか!!! 誰かが大眼玉を頂戴してゐる。相手方が、何と詫言をいはれたのか、小声であるからきこえませんでした。徒然に困っている私は、此出来事に、注意して聞きましたが、考へた。

叱られて背戸に立つ子や時雨降る

何の失策か知らねど、あんなに叱られてゐるのは、土方であらふ。叱っているのは、小頭とでもいふ人が、それとも事務員か。敬語を使ってゐるからは、奥江さんといふのは、上役の人に違ひない。技師?とも思へる。古歌に、

底干(そこひ)なき淵(うみ)やはさわぐ谷川の

あさき瀬(せ)にこそ仇浪(あだなみ)はたて

とあれば、ガミガミ叱らねば、人が使へぬ程度では浅瀬で、何もおっしゃらないで、多数のあらくれ男の土方を、手足の如く使ふ、奥江さんとかいふ人は、淵の様な人格者であらふ。誠に敬慕すべき御方ではある、と感じ入りました。...

此出来事から数日の後、私の事から家庭に風波が起りまして、母は外へ逃げ出し、父が追ひかけて行かれた時、通りがかりの一紳士が止め、仲裁して内に入り来られ、争ひの原因は、「病める子をいたはってやれよ」と常々いふに、妻は兎角つれなくする。その為に此有様、お恥づかしい次第、と父のいへば、紳士は、其お子さんを見舞ひ度しとて、私の枕許に来られて、「おとうさん、此子は、息子ですか、娘ですか」と問はれました。其筈、かりそめの病氣と思ふてゐたに、どうしても癒えぬ。失望の極、女の命ともいふ、髪を切っしまい、其次是剃り落して、今道心の青坊主になってゐたのが、一分位ものびて、法海坊の幽霊の様で、一見男女の見分けが付かなかつた。父に「息子か、娘か」と問はれたのは、其為でありました。

其日は両親をさとし、双方を慰めて帰られ、三日目には、夫人同道で、見舞に来て下さり、菓子と、金包と、一枚のカードとを賜はりました。金包には赤鉛筆で、「神の恵」とだけ書いて署名はしてありませんでした。カードを手にとって見ると、赤地に福寿草の絵で「今は救ひの日なり、哥後六ノ二」と書いてありま

した。さては此方はクリスチャンであるな、と思ひ、「貴男は信者でありますか」と問へば、先方が驚かれて、「信者といはれるのは、基督教をきいた事でもありますか」との答へ。「ハイ。信者であればお懐かしい。私の祖母は兵庫教会の古い信者で、今此カードが読めましたのも、新田夜学会といふ、多聞教会の信者によって、出来てみたのへ、私は三年間学ばして頂きましたお蔭であります。...(中略)...其お蔭で、今此カードが読めるのであります」と申上げました。紳士は、「成程、そんな訳でありましたか。兵庫教会に、御祖母さんの御教友方も、生存して居られるかも知れませぬねえ」と申されて、いと喜ばしげに、ご帰宅にられました。」(p.17 ~ p.23)

この紳士こそ、数日前愛子が壁越しにその名を聞いた奥江清之助その人である。奥江は1855年生れ、はじめ内務省土木局の役人であったが、このころは役人を辞し、技師として各地で土木工事を指導していたらしい。奥江の卓抜した人格の影響力は、彼の許に働く土方労働者たちが皆禁酒を誓うほどだったという。やがてアメリカに移住するが、愛子は奥江を生涯「霊父」として敬慕することになる。

## 旧き人間から新しき人間へ (神の義の不覚からその自覚へ)

その後は兵庫湊川の愛子の「伏屋」に、奥江をはじめ、かつての祖母の教友など、多くのクリスト者が訪れてくるようになる。愛子も病床にあって、いままで持てあましていた時間のすべてを聖書の独学に当てる。読書百編、意自ずから通ず、である。(事実、後に出版される彼女の著作には、旧新約聖書が縦横に引用され、そのうちもっとも多いのが、驚くべきことにパウロ書簡である。その理解もきわめて深い)。愛子は教会用語で言う「求道者」になっていたのである。

「奥江様申さるゝ様、人は皆罪を犯したるものなればこれまでの悪しかりしと思ふ事は悉く神のみ前に申して悔い改めねばならぬと。されど妾は自己の罪あることを覚らざりしをもて神を信ずる念はあれど罪を悔ゆる思ひあらざりしが、猶ほ読み且つ考ふるうち、聖

書は次第に光を放ちて神の恵み基督の愛を知らしむると共に我罪科をも覚ふるに至り、これまでの悪しき行ひや罪の思ひは歴々として胸に浮ひ出で、日ねもす夜もすから思ひ出でては消なん思ひもするを、如何にせば宥(ゆる)さるべきやと泪ながらに神のみ前に詫がる思ひはすれど、なかなか赦されたりと自ら覚ふる思ひはせず。神を知らざりしうちにこそ却て心安かりしものをと思へど、今は忘るゝにはあまりに瞭らかなる罪を覚え、わが罪我を攻めて心苦しさ云ふべき様なし。」(傍点筆者)(『伏屋の曙』p.71)

ここには、愛子がキリスト教に触れ、否むしろ、(われわれの用語を使えば)キリスト宗教」に、パウロのいう「律法」に触れ、「宗教的人間」になったこと、すなわち、「ローマ書7章の人間」になったことが、実に見事に表現されている。実際はしかし、ここまで来ても、ここを突破できず、ここに留まってしまう信者・求道者のいかに多いことか。教会もまた屢々、この罪の自覚こそが救しへの希求と悔い改めとしてキリスト信仰の前提であり、この自覚が深ければ深いほど神の恵みも大きい、それが信仰義認であると教える。しかしここが危ないところだ。聖書は本当にそう教えているのか？キリスト者はいつまでもローマ書7章の人間から脱出できず、宗教的人間の懊悩と諦念に呻吟してよいのか？ここでこの問題に深入りするつもりはないが、次のパウロの言葉を挙げておこう。

ローマ3:20 それ故、律法を行うことによっては、すべての人間は神の前に義とされない。律法によっては、罪の自覚が生じるのみである。

3:21 しかるに今において、神の義は、律法とは無関係に、しかも律法と預言者によって証しされて、示されている。

3:22a すなわち神の義は、イエス・キリストのまことにより、すべて(それを)受け容れる人へと(示されている)。

余人はしらず、パウロでは、罪の自覚はあくまで罪の自覚であって、罪の自覚やそれをもたらす律法が、人を義や罪の赦しに導くことはない。し

かし、愛子にとっては、宗教的人間、すなわち、罪自覚的な「旧き人間」から「新しき人間」へ、ローマ書7章の「わたし」から同8章の「キリスト・イエスの中にある者」へ、の転換は早かった。(受洗は愛子23歳の春)。否、転換というも愚か、彼女は夙に、奥江清之助に出会う前から、苛酷この上もない現実、すなわち、十字架を背負うことによつて、「キリストのまことによつて」生かされ、「キリストの中に」あつたのである。ただそのときは、神の義がそこに示されてはいても、罪の故にそれと気づかず(2C4:3f.)、受け容れようとしなかつただけである。「あるあるある」とそこで語られてはいても、「ないないない」と言い張っていただけである。

「聖書に依れば三十八年間病みたる者さへ癒され又ラザロの如く死にてすでに四日経たるをさへ甦らされたる程なれば全能なる神のいかで我病を癒し能はざることあるべき。されど妾を此儘に置き給ふは必ず深き思召しある事なるべし。妾は以上述べ来りたる如く賤しき仲居奉公を為し居りたる程なれば、身を飾るをたゞ事とし、栄耀栄華を望みて喜びとしたれば、全快せば又元の心になりて貴き魂さへも亡ぼすべきを憐み給ひ、斯くて数限りの苦勞を授け、空しき世に頼むべきものなく、肉体のはかなきものたるを悟らしめ、唯神により頼み眞の自由と靈の欣喜(よろこび)をあたへんとて、此貧困と疾病とを与へたまへるにこそ。されば、この病は妾に於ける幸福にして、聊かも憂ふる事なかるべきなり。」(傍点筆者)(『伏屋の曙』p.76以下)

「神が救ひたもうには、氣短に手早な事はなさらず、度々手をかへ品を替へて、御前に引き寄せ給ひます。芸妓志願の其時も、もう少しの事で(私に)手違ひをさせて東へ行つても西に行つても皆引き戻し給ひました。...(中略)... 次は井戸へ身投げせんとしたとき、考へれば考へるほど、妙なる聖手(みて)の守りがあつて最後には斯く救はれるとは、氏無うして玉の輿には乗り損ねたが、あらゆる逆境を踏み台にして、神の御許に近づけ給ふ、深き御摂理であつたかと、流した涙の一滴も、今は拾ふ眞玉白玉！ ヨブ記にある如く「神は悩める者を、其の悩みによりて救ひ」<sup>4)</sup>とは此事であります。悩める者を慰めを以て救ふなら分かつてあますが、悩みそのものをあて、救ひ給ふとは臍に落ちぬと思ふべきですが、救はれた者には、逆から来た恩恵が分かります。」(傍点筆者)(『闇より光へ』p.155～p.157)

「闇即光」(2C4:6)、「十字架即復活」(2C4:10f.)というパウロ的福音の核心を、ほとんど教育らしい教育も受けなかつた貧しい一女性が、しかも二十代の若さで、身をもつて理解し掴んでいたなどということは、筆者にはほとんど信じられないことだ。

奥江が愛子に贈つたカードに書かれていたという聖句「今は救ひの日なり、哥後六ノ二」、詳しくいえばコリント後書六章二節後半「見よ、今は恵みの時、見よ、今は救ひの日」愛子28歳のときに出版された『伏屋の曙』(短歌の部 p.9)には、この、パウロ義認論を最も簡潔に伝える美しい聖句に捧げた次の和歌が掲げられている。

#### 哥後六ノ二

うなさるゝ罪の眠をさませかし  
救ひの光汝に臨めり

これは聖書讃歌というも愚かな、ほとんど完璧な六章二節の言い換えである！ 宗教的人間にとっては罪がどれほど堅固なりアリティを持つと(ローマ7章)、新しき人間にとっては、それは所詮恵みにより凌駕され克服された現実にすぎず(ローマ5章)、したがって夢の中の現実(「うなさるゝ罪の眠」)にすぎないということ、それ故、汝には、この悪夢から一刻も早く目を覚ますことが緊要であるということ(「見よ」)、そうすれば「汝に」、汝の現実に、汝の十字架に(「今」)、「救ひの光」が臨んでいるということ(「恵みの時」「救ひの日」)がわかるであろうというのである。キリストによる「人即義」「死即生」の自覚(R3:28; R6:11)(「赦されたりと自ら覚ふる思ひ」)である。しかしこの「罪の眠」から覚めるために、愛子がどれほどの苦悩の半生を送らねばならなかつたかは、われわれがすでに見てきた通りである。

座古愛子の驚嘆すべき福音理解を示す随筆や歌はこのほかにもあるが、紙面の都合上、ここで割愛するほかない。

## おわりに

最後に、その後の彼女の生涯について簡単に記しておく。

明治33年3月3日夜 兵庫湊川の自宅の、鶏の寢床の上に藁と箆で作られた愛子のベッドの上で、兵庫教会の牧師により、数人の信徒が見守る中で洗礼式が行われた。これ以後、多くのキリスト者との交流が始まる。

同39年 自叙伝『伏屋の曙』を出版し、評判を呼ぶ。全国から夥しい反響の手紙が来る。また信者・求道者が彼女の許に集うようになる。次いで、同41年『伏屋の曙続編』が、大正2年に『聖翼(みつばさ)の蔭』が、出版される。身動きの出来ない愛子にとって、文書伝道が神から与えられたディアコニアになったのである。一種の無給あるいは自給宣教師といつてよい。

年老いて行く養父にいつまでも生活の面倒を見てもらわねにも行かないとて、義母や義妹と貸し布団業を始める。(しかし、後年、愛子を実の子として守り育ててくれたこの養父は、そのころ目をかけてやっていた男によって、何と非業の死を遂げたという)。

その後、(筆者の手持ち資料では正確な年はわからないが)、多分大正の初め頃、愛子は神戸女学院に伝道と購買部の学用品販売の仕事で雇われることになる。神戸女学院の創始者タルカット女史が愛子を知り、大切にしていたからであろう。そしてここに彼女は約二十年間住み込みで働くことになる(寝たままで学用品を買いに来る学生たちに対応していたという)。清く平和な別世界で、夢のように歳月が流れた、と愛子は後に述懐している。

やがて女学院の新校舎建設にともない、彼女はここを去ることになるが、それから彼女が亡くなる昭和20年までの十数年間のことは、残念ながら資料がなくて不明である。戦前戦中のキリスト教徒受難の時代とて、貧窮の中に亡くなられたのではないか。

その間、昭和4年(1929)に、後の有名な念仏者中村久子が愛子に面会に訪れ、決定的な影響を

受ける。中村は昭和42年、神戸女学院と臨濟宗祥福寺(当時住職は後の管長山田無文)にて座古愛子の二十三回忌法要を営んでいる。彼女自身の死の前年のことであった。

## 注

- (1) 念仏者中村久子(1897～1968)は、門徒以外にはまだ知られていないと思われるので、簡単に紹介しておく。(以下はすべて彼女自身の自叙伝『このころの手足』春秋社による)。
- 久子は明治30年高山市に生まれた。3歳に満たないとき、両手両足が突発性脱疽にかかり、両親が手術を躊躇しているうちに左手首がもげ落ち、遂に両手足を切断、以後四肢なき子として筆舌に尽くし難い人生を歩んで行くこととなる。勿論両親の苦しみも大変だった。量職人だった父親は藁にも縋る思いで天理教に入信するが、「忘れもしない7歳の年、7月も半ば過ぎ、連日の大雨に宮川の水が増して、恐ろしく聞こえる水音に、ともすれば眠りを妨げられそうな、物凄夜のことでした。一緒に寝ていた父は突然私を揺り動かし、『ひさ、とゝ様が乞食になっても、死んでも決して放さないよ』と言いながら、つよく抱きしめます。とゝ様、今夜はどうしたのかしらと子供心にも不思議に思った矢先、父はそのまま夜具の上に倒れました。……』父が39歳で逝つた後、赤貧の中、久子は病弱な母と祖母に育てられる。幼い久子にとっては人形が唯一の友であった。「紅い椿模様の着物がよく似合う人形の、ふさふさとした豊かな黒髪よりも、鈴のようなつぶらな瞳よりも、何よりもうらやましいものは小さいながらも指の揃つた二本の手、二本の足でした。ほんのりと紅をさした指を持つお人形の幸福、私の幼い憧れは、いつもはかなく寂しいものでした。「あんたはお手々もあんよもあって好いのね。そのお手々、あたしに貸してちょうだいな」無心な人形にこう言いながら頼ずりする私。それを見る度に、顔をそむけて涙をそっと拭く祖母、それは私が生涯思い出される深刻な祖母の印象となってしまいました。久子は知的には人並みはずれて優秀な子であつたが、当時はもちろん、学校に行くことなど許されるはずもなかった。しかし彼女は、石筆や鉛筆を口にくわえて字を祖母から習っていく。やがて母は生活苦から久子を連れて再び貧しい量職人と再婚するが、重い障害を負った連れ子である久子はここでも暗く悲しい日々を送らなければならない。9歳のときに久子は突如両眼を失明する。

四肢なき上に盲目となつた久子の世話のために、母は久子のたった一人の愛する弟を、孤児のように岐阜の育児院に送らなければならなくなる。その「前夜、闇夜にまぎれて母は、盲いた私を負うて足音も忍びやかに、今宵を限りの愛し子のいる家（このとき弟は叔父の家に居た）の前にそっとたたずみました。人の世の悲しいさだめさえ知らない無心のわが子の声を、よそながら聞きつつ、後ろ髪引かれる思いで、泣きぬれた顔を襟元深くうずめ、悄然と立ち去った母の心を誰ぞ知ろう。『……かゝ様、どこへ行くの？』とぼとぼと力なく歩んでいる母。『かゝ様とよい所へ行こうな』その声は消え入るように寂しい。夜更けの道に、小砂利を踏む母の駒下駄の音さえ何となくもの悲しいひびきを刻んでいる。鬼気迫る寂とした大自然の中に母と子は、妖魔の手ぐる糸に牽かれるかのように、一步一步よるめきながら吸い込まれて行く。ゴゴッ、不気味な音をたてて、高原特有の夜風が樹々の梢を、強くゆるがせては去る。恐怖に襲われて、思わず私は母の肩にしがみつく。『ひさ、堪忍してな』とかすかに首を振り向けた母の顔から、冷たい涙が落ちて私の額に。ただ、わけもなく悲しくなり、母の背で泣き出した私。なだめるように低い声で何か言いつつ、とぼとぼ歩み続けている母。かゝ様はどこへ行くのだろう。初夏といっても、新緑がようやく萌えだしたばかりの、飛騨高原の夜は肌寒く、冬の名残りが身にしみる。やがて母がたたずんだ所は、直ぐ足元で、ドドロー、もの凄いい水音が地ひびき立てている激流。町を遠く外れて東南、ここは宮川の上流。じいっと身動きもせず、いつまでも、いつまでも立ちつくしている母。何とはなしに襲いかかるような恐ろしさに、固く小さくふるえている私の身体にも、夜露が冷え冷えと降りて来る。『かゝ様、こわいよッ』『……』母は身じろぎもしない、放心した人のように。『……』地獄の底を思わせるような凄いい水音は、ひっきりなしに大地をふるわせている。『泣かんでな……何でもないの、……帰ろうな』かすかな溜め息をついて、よろよろと母は歩きだした。……』

実際、障害児を持った親で、子供を殺して自分も死のうと考へなかつたというような人はいるだろうか。しかしこの悲母観音（後に久子は母をそう讃えている）はどん底のなかでこの小さな生命の火を守り育てて行く。半年後、医師の治療のいかいもあつて、久子は奇跡的に光を取り戻す。それからの彼女は、強い意志と血のにじむような努力で自らの障害を乗り越えて行く。われわれには想像もつかぬことだが、口と両腕（両手ではない）と、ときには脚（足ではない）を使って、自分で食事

をすることはもちろん、裁縫（口で運針するために、どうしても唾でぬれてしまうのを克服するのに13年要したという）・編物・炊事・書道等々、当時、女性が身につけなければならぬとされた技能や仕事はすべて、自らの独創と努力によってマスターして行く。

それにしても、母が再婚した家で、義父や異母兄妹と暮らしていくのは容易なことではなかつた。「不具の子を家の子と思われることは恥ずかしい、と、他人に見られることをひどく嫌われて、義父の所では私は二階の一室のみに朝夕を過ごさせられておりました。お便所に行きたくてもすぐには行かれず三時間も五時間も辛抱しなければならぬのは、食事の時間が遅くなるのよりも辛い悲しいことでした。そして経済的にも、将来の見通しのまったくない厄介者に過ぎなかつた彼女は、死ぬことばかり考えていた。『家では幾人かせいで幾人遊んでいる。義父のこの言葉は、いつも母と子の胸をいばらのとげで刺すようにこたえます。『お前さえ無かつたら、こんな苦しい思いはしないのに……』と、母は苦しさを抑えかねて、つい口に出すこともありました。「死んだらえゝのに、死にたい」……四肢障害者が逆境に生きていくことは決して幸せでもなければ、喜ぶべきことでもない。四六時中、頭の中を去来するものは、死のみでした。祈り求める死には直面せず、求めざる生のみ押し寄せて、そこにさまよわねばならぬとは、目に見えぬ宿業の深さ、悲しさでありましょうか。』

20歳のとき、久子は、経済的に自立するために、ある人の世話で見世物小屋の芸人になり、「だるま娘」として出演することになる。ここは、いわゆる香具師（やし）といわれる渡世人の世界であるが、ここで久子には、人気芸人になったこともあつて、予想外の自由な世界が開かれることになる。そうしてこういう世界には、彼女を人間として扱うという、堅気の世界にはないよさがあり、彼女はここに22年間暮らすことになる。この時代に彼女は恋もし、結婚もし、子供も産む。結婚は四度しているが、最後の中村氏との結婚まで、最初の二回が死別、三度目が夫の放蕩と、必ずしも幸福だったとはいえない。（座古愛子女史に会いに行ったのもこの時代である。）とはいえ、四肢なき彼女には、手が、とりわけ男手が、どうしても必要であり、結婚は不可欠なことだった。その間に障害者故に味わわねばならなかつた幾多の辛酸と苦難があるが、ここでは割愛する。

やがて久子は、いくつかの宗教に触れる機会をもち、昭和12年来日してきたヘレン・ケラー女史と出会って深い感銘を経験する。昭和13年、彼女は

縁あって浄土真宗に入信する。これはまた彼女の懐かしい祖母の帰依していた宗教でもあった。念仏と各地での講演の生活が始まる。しかし、既に宗教に触れる前に、苛酷な現実の試練を受けていた彼女にとって、宗教宗派とか入信とかにどれほどの意味があったろう。宗教が彼女を作ったのではない、現実が彼女を新たに創造したのである。久子はその後も多くの日本人に深い感動を与えつつ、昭和43年その生涯を終える。72歳であった。

- (2) この浄土真宗流の「二種深信論」は念仏宗すべてに共通の構造というわけではない。これを取らず、善導の二種深信を別様に解釈する宗派も存在する。他方、キリスト教にもこれと同じような理解が

あって、(真宗の間接的影響かどうか定かではないが)日本ではむしろそれが一般的といってよい。しかし、筆者の理解するところでは、パウロは明らかにこの立場の拒否である。

- (3) 姫路市書写山円教寺のことであろう。  
(4) ヨブ記 36 : 15

### 参考文献

- 座古愛子『伏屋の曙』明治39年 警醒社  
座古愛子『伏屋の曙 続編』明治41年 警醒社  
座古愛子『聖翼の蔭』大正2年 警醒社  
座古愛子『闇より光へ』昭和6年 森書店

## Life and Faith of Aiko Zako

Ogawa, Osamu

Aiko Zako was born in 1878 in Kobe and passed away just before the end of the Second World War. She got rheumatism in the girlhood and couldn't move her own body all her life. Since she was baptized at the time of 23 years old, she often published poetry and essays, and was well-known as a Christian poet in Japan before the War. But her name is forgotten after the War, and we can hardly obtain her writings nowadays. This thesis tries to make the wonderful faith of this forgotten poet clear from the Bible.

**Key Words :** illness, poverty, death, identity of cross and resurrection